

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「準動詞に関する通言語学的研究」（2014年度第2回（通算第5回）研究会）

Title: Cross-linguistic Research on “Verbals” (The 5th meeting)

日時：2014年12月20日(土), 21日(日)

Date/Time: 20-21 Dec 2014

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

1. オチルバト・サンボードルジ (AA 研外国人研究員／モンゴル国科学アカデミー)

#### 「モンゴル語オイラト方言の形動詞について：ハルハ方言との比較対照を通じて」

モンゴル高原西部で使用されるモンゴル語オイラト方言は、モンゴル文字を改良したオイラト文字（トド文字）による文語が古くから発達していた。本発表では17世紀に書かれた二つの文献資料、*Yeke caaji* (モンゴル法制史) と *Sarayin gerel kemeeku tuuji* (『月の光といわれる物語』) を対象に、この資料中に用いられた形動詞の統語的用法を観察した。

その結果、使用頻度の高い4種の形動詞にはいずれも単独で文末で（つまり主節述語として）用いられた例がなく、文末で用いられる際には常に助動詞を伴うこと、格接辞をとりうること、形動詞語尾が派生接辞として用いられるケースは現代のハルハ方言に比べて頻度が低いことなどを明らかにした。

2. 呉人徳司 (AA 研)

#### 「チュクチ語の準動詞」

本発表では、チュクチ語の準動詞と言われる形動詞と副動詞について取り上げ、それらの形態的、意味的特徴について概観する。

チュクチ語では形動詞を派生するのに、-lʔという接辞が用いられる。-lʔは名詞、形容詞、動詞語幹などに付加される。名詞語幹に接続すると、その名詞の意味する対象を所有するもの、形容詞に接続すると、それらが表わす性質や状態を有するもの、そして動詞語幹に接続すると、その動詞が表わす動作の主体（行為者）対象を表わす。形動詞は格・数・人称を表す屈折接辞をとることができるが、名詞述語としても使われる。

チュクチ語の副動詞の形成には、専用の接辞 *-ineŋu/-enaŋo*、*emre-...-ŋe/amra-...-ŋa*、*-masə* のほかに、随伴格 *ya-...-ma*、与格 *etə/-ytə*、場所格 *-k*、道具格 *-te/-ta* などの格接辞から由来する接辞が用いられる。従属節と主節の意味関係には、時間的先行、同時、後続、原因、目的、逆接などがあるが、このうち専用接辞で表されるのは、先行、目的、

逆接である。格接辞から由来する接辞で表されるのは、同時、後続、原因である。なお、チュクチ語の副動詞はエスキモー語のような法、人称などによる屈折変化はしない。

### 3. 渡辺己 (AA 研)

#### Nominalization in Sliammon

本発表は北アメリカ先住民諸語のうち、セイリッシュ語族に属するスライアモン語に見られる節の名詞化について概観した。同言語では、しばしば品詞としての名詞と動詞の差が問題になる。しかし、所有の接辞との共起、アスペクトを表わす重複法との共起などから、この2品詞を分けることは可能である。節は、直接法、仮定法、名詞化節、関係節によって異なる形態統語的特徴を見せる。名詞化節は主語を所有者標識によって示す。所有者標識が接尾辞の場合(2人称複数, 3人称, 3人称複数)は名詞化標識の前倚辞 *s* が現われる。名詞化節はテンス・アスペクト標識や明示的目的語などを保持する。名詞化節が使われるのは、時を表わす節(「～する時」など)、知覚動詞の補文(「～するのを見た」など)、非現実(「～したい」など)、評価動詞の補文(「～するのが好き・嫌い」など)、認識動詞や間接話法の補文(「～すると知った」など)である。この他に、主語を所有者標識で表示するという意味で名詞化節と考えられる構造が関係節の一部に使われる。すなわち、主語と目的語以外の項を関係節化した節である。それらの項はすべて斜格の項であるが、関係節(すなわちここでは名詞化節)の構造の違いによって、斜格項には2種類あることが分かる。ひとつ目は、逆受動構文、あるいは2項他動詞(アプリカティブ接辞で派生されたものも含む)の論理的被動者を関係節化する場合である。ただしこの時、前倚辞 *s* は現われない。ふたつ目は、それ以外の斜格項を関係節化する場合であり、この場合は、主語を表わす所有者標識が接尾辞の場合、名詞化標識の前倚辞 *x<sup>w</sup>* が現われる。

### 4. 松岡雄太 (AA 研共同研究員/長崎外国語大学)

#### 「朝鮮語の準動詞：定動詞化に関する研究の課題と展望」

朝鮮語は「きれつづき」を明確に表現しわけける言語であり、従来、「準動詞」という概念を朝鮮語に適用して記述、分析した研究は管見の限り皆無であった。朝鮮語に仮に準動詞という概念を適用するならば、定動詞化の説明に有効であろうと考える。準動詞に該当する朝鮮語の連体形、名詞形、接続形は、連体形を除いて定動詞化するという現象が見られる(ただし連体形も日本語の「ノダ」構文に相当する迂言的な形としてモダリティを表すことができる)。これに関する研究は、1990年代後半から本格的に始まったが、従来、どのような形式がどのようにして定動詞化したか、定動詞化した形式の意味はどのようなものであるかをそれぞれ断片的に記述する段階に留まっていた。本発表ではこれらの先行研究に対して、その問題点(今後の課題)を指摘し、準動詞(名詞形と接続形)の定動詞化は、半言(*banmal*)体の発達と関係があり、また朝鮮語における

ムード体系の変化とも関係があるのではないかという仮説を提示した。

#### 5. 大塚行誠 (AA 研共同研究員／日本学術振興会)

##### 「ティディム・チン語に見られる2種類の述語動詞句」

本発表ではティディム・チン語（チベット・ビルマ語派クキ・チン語支，ミャンマーおよびインド）の口語体に見られる2種類の述部動詞句（動詞複合体）について報告した。ティディム・チン語には，語のレベルにおいて動詞の屈折が見られず，定形動詞と非定形動詞の区別も存在しない。しかし，句のレベルから考察すると，否定標識（接語）と叙想法（接語）の付加方法から，定形タイプの述部動詞句と非定形タイプの述部動詞句ともいえるような，2種類の述部動詞句があることが分かった。

本発表では，これまで先行記述に無かった両タイプの述部動詞句の形式について述べた上で，平叙文における2種類の述部動詞句の語用論的な機能について議論した。

#### 6. 山田敦士 (AA 研共同研究員／日本医療大学)

##### 「パラウク・ワ語における動詞」

孤立的言語特徴をもつパラウク・ワ語においては，動詞の文中における機能に関わらず，その形式は常に一定である。本報告では，他言語との比較対照の観点から，「形動詞」の機能に対応する「名詞的用法」と「副動詞」の機能に対応する「副詞的用法」の言語特徴を提示した。

名詞的用法においては，パラウク・ワ語の動詞における名詞化現象について分析をおこなった。具体的に，形式名詞 *pa* による節や句の名詞化の問題、形式名詞 *cie* による所有名詞化の問題、さらに動詞がそのまま名詞的な意味と解釈される認知的な名詞化について、具体例とともにその特徴を示した。

副詞的用法については，孤立型言語において頻繁に見られる動詞連続に焦点をあて、パラウク・ワ語における同現象の分析をおこなった。パラウク・ワ語の単文における動詞連続は二つの類に分けられる。一つは「連結型」、もう一つは「介在型」である。連結型は、V1 である移動動詞と V2 である動詞（[+意志]）が動詞複合体となり、同一主語を指示する特徴をもつ。一方、介在型は両動詞間に他要素が介在するものであり、その項構造から、V1 と V2 の「表層」の主語項が異なるタイプ、V1 の目的語項が V2 の主語項を兼務するタイプ、V1 と V2 の主語項が一致するタイプに分けることが可能である。それぞれの特徴を示したうえで、関連する問題（孤立的言語における文構造の認め方など）についても言及した。

※このほか、研究課題終了後の成果刊行について確認した。